
お月見

桜希 澪乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お月見

【Nコード】

N0587F

【作者名】

桜希 澪乃

【あらすじ】

世紀末を数ヶ月前に控えた2000年9月。今年のお月見は何かが違う？

（前書き）

この作品は2000年に書いたものです。ですので現在とは若干
雰囲気異なるものがあります。ご了承ください。

（ちよつどゝ世紀末ゝミレニアムゝという言葉が流行していたの
で、勢いで書きました）

ノストラダムスの大予言 が外れ、新世紀に希望を持つものが
増えた西暦2000年。

「ミレニアム」という魅惑の言葉を覚え、事ある毎にそれを使用
するのが年初より流行ってもう9ヶ月。その頃になると「今世紀最
後の」という言葉が新たに加わった。

そして熱に浮かされたように猫も杓子も「今世紀最後の」行事の
オンパレード。

「今世紀最後の運動会」、「今世紀最後の遠足」、「今世紀最後
の文化祭」、「今世紀最後の」

もういい加減にしてくれと、誰かが叫んだのも、頷けることであ
る。

そんな9月中旬。誰もがうんざりしながら「次は今世紀最後
の何だ」と呟いている神奈川県、某所にある海南大学附属高校の部
室棟の一角で、素っ頓狂な叫び声があがった。

「なんだそれえ」

「いいじゃないっすか、神さん。だって 今世紀最後 ですよ」

「何でもそれを前に付ければ許されると思ってない？ノブナガ」

「だから、いいじゃないっすか」

「別に、そうムキになることもないじゃないか、たかが『お月見』
くらいで」

「ええ違いますよお。だって、20世紀の『中秋の名月』は明日し
か見れないんですよ」

「だから、お月見やりましょう。と信長は続ける。

「い、や、だ」

「なんでですかあ」

「つまんないもん」

「つまんないもん、って……。いいじゃないですか、情緒があって」

「ジヨウチヨ？ノブナガ、熱ある？」

真顔で驚いて 普段は茫洋としているか、ただニコニコしているかのどちらかなので、この表情は珍しい 神は信長の額に手を当てる。それを払いのけて、信長はだからあ、と神に向き直った。

「やりましよう『お月見』」

「いやだ。絶対にいやだ。ただ月を眺めるのに校舎の屋上に忍び込むなんて真似は絶対にしたくない。ぼく、優等生で通ってるのに、警備員に見付かったら困る」

「うわ。なんか凄いきこってます、神さん」

「なんなんだ、この騒ぎは」

言って部室の扉を開き入ってきたのは牧。首にタオルを掛けた格好で、騒動の元である信長に視線を向ける。「またお前か」

「また、って……ヒドイですよ牧さん。俺はただ、神さんをお月見に誘ってるだけなんですから」

「オツキミ……それは何かの食い物か？」

「ああ、牧さんまで……」

「いや。別にそういつつもりじゃ……」

「そういつつもりって、どういつつもりだったのさ牧」

「いや。だから……」

口籠もる牧は咳払い一つでその場を仕切り直した。

「で、何の騒ぎだ」

「だから、お月見ですよ、お、つ、き、み」

「なぜだかが月見ごときでそんなに騒ぐ」

「今世紀最後のオツキミなんですよ」

「またその台詞か」うんざりしながら牧は言う。「もういい加減聞き飽きた」

「なにいつてんですか。20世紀最後の仲秋の名月ですよ」

「あのなあ……今世紀最後っていつたって、月の光がここまで届くの何年かかっと思ってると思ってるんだお前。本当の意味での20世紀最後のお月見なんてものはないんだぞ」

「あ」

「なんだ。気付いてなかったのか」

「……あーあ」

惚けた信長を見ながら軽く溜息を吐いて、神は牧を軽く睨む。

「せつかく黙ってたのに」

「……お前も相当意地が悪い」

「夢を壊す真似をしたくなかったただだよ。きっとノブナガならサ
ンタもいるって信じてるはずだから」

「サンタ？」

「うん、サンタ。あ、でもこんな調子じゃ、今年のクリスマスもき
つと言い出すかも」

そう続けた神に、牧は真顔で返す。

「サンタは、いるぞ」

「……………」

*

*

*

……そして翌日。

「あーあ。結局こうなるんだよねえ」

その眩きと共に吐いた溜息は、嬉々とした表情の信長と何故かそ
れに付き添っている牧とに黙殺された。

場所は、海南大学附属高校の部室棟　　の屋根上。

いそいそとススキを飾っている信長は、今にも鼻歌でも歌いそう
な勢いだ。牧はそれを感じしたように眺めながら、それでも「なあ、
ここに置いても構わないか」と信長に指示を仰いでいる。

「できた」

「おお。本格的じゃないか」

「なにが本格的なのさ。っていうか、本格的なお月見の作法なんてある訳？」

不満という文字を大きく顔に書きつけたまま、神は「達成感」を満喫しているふたりに向かってそう言う。

「まだ拗ねてる」

「いいさ、放っておけ」

どうせ口でああ言っても、本当は楽しいんだから。

牧の言葉に、あからさまにむっとした表情を浮かべて神は

「そんなことない」言い返す。

「月を見ながらお団子食べるだけなのに、何でこんなに楽しめるか、理解できないんだよ。別に、月を見るだけなら部屋の窓辺でもいいじゃないか。なのにな」

「とか言いつつ、団子はきちんと食っ」

「あ。ここのお団子美味いんすよ」

「うん、美味しい。でもね」

「ほら、みたらしまだ食ってないだろう」

「あ、ここのみたらしは本当に美味いんすよ。でも、絶品なのは黒ごまなんですけどね」

神は与えられるがままに団子を口に運ぶ。

「ハハラ、ホーヒフホホハ、ハフへ」

「なに言ってるか分からないぞ」牧の言葉に、団子を飲み込んで

「だから、そういうことじゃ、なくて」と言い直す。

「月も、部屋の中から見られる。当然、団子も部屋の中で食べられる。なぜ外でやるのか。外でやらなければならないのかが理解できないから『お月見』は嫌いなんだ」

「だって、お月見だからでしょう」

「しかも、満月だったら1年間で12回ある。なのに、仲秋の満月だけがなぜ特別視されるのかも分からない」

「それは……」

「一番綺麗な満月が見られるから、じゃないですか」

「おお、ノブナガ冴えてるな」

「いやー、それほどでも」

「満月なら、寒い12月や1月の方がずっと綺麗だ」

「……………」

「あっ！」

「どうした」

「うさぎですよ。うさぎ」

「うさぎ……？」

「そう。中秋の名月の日だけしか、うさぎが出てこないから」

「月面のうさぎは、南半球に行くと読書をする老婆に見えるんだ。場所によっては、ワニにも見える」

「じ…じゃあ。かぐや姫が帰った記念日、というのは……………」

色々と出てくる信長の言葉に、神は深々と溜息を吐いた。

「でも、お月見は日本と中国にしかないぞ」

と、牧が信長の悲壮な表情を見て助け船を出す。

「それは、文化形態が似通っているからでしょう。日本の文化のおよそ半数近くは、中国大陸を通ってやってきたのだから。墨も、紙も、漢字も、仏教も」

「うづむ……なかなか手強い」

「いいじゃないっすか、そんなこと！」

「お。信長ついに逆ギレ」

「ただ純粹に月を眺めて楽しむだけで、いいじゃないですか。そんな理屈こねなくても」

「うん。その答えが正しい」

「へ？」

「だから、別に 今世紀最後の中秋の名月 だからって、特別扱いしなくても、お月見はお月見じゃないか。なのにみんなしてそればかり言うからさ。お月見なんて、月が見たいときに見ればみんなお月見なんだよ、ぼくにとって」

「さすが神さん。考えてることが違う」

「でもお前が一番屁理屈こねだ」

「だってさ、本当に、純粹にお月見楽しむのに作法なんてないですよ。そんな作法なんていらなと思うてる。なのに、いちいちこだわるの、やなんだよね」

「なら、はじめからそう言えればいいものを……」

「どうせ言ったところでまたいつものへ理屈だって、言うでしょ、牧は。ならば、答えを自分たちから出させるように導く方がいい」

「……………」

「……………なんにしても。これで、あとは楽しむだけでいいんだろうな」

「そうだね。天気にも恵まれたし」

「じゃあ、今から本番行きましようよ」

信長の言葉で、改めて 今世紀最後の中秋の名月 は幕を開けた。

*

*

*

「いい月だねえ……………」

そうしみじみ言いながら、神は茶を啜る。ずずず……………。まるで縁側でひなたぼっこをしている老人さながらの風情である。

「若さが足りん、若さが」

「神さん。背中に哀愁漂ってますよお」

「なぜこいつといると、こんなにも まったり するんだろう」

「それは神さんが落ち着いてるからですよ」

「落ち着いてる？これはもう、落ち着いているの域を脱して、老成しているといった方が正しいぞ」

まるで御隠居だ。そう牧は続ける。

「もっと、年相応の若々しい態度をとれないのか、あいつは」

「無理です、多分」

「そもそもお月見なんてイベントは、年寄りじみた奴にはぴったりするんだ」

などと牧が哀愁漂う神の背中を睨み付けながらそう悪態を吐くと、突然神がこちらに向き直った。

「聞こえてるよ」

「ああ、聞こえるように言ったからな」

「そう……あ、お茶のお替りいる？」

「いや、もう結構だ」

「牧さあん、怖いっす。この雰囲気やですよ」

なんでせつかくのお月見でこんな思いをしなくちゃならないんですか、俺。信長は涙声で呟く。それはいとも簡単に黙殺された。

「だから、お月見なんて、みんなでやったところでそんなに楽しいイベントになる訳じゃないのに。これで分かったでしょ、ノブナガ」

「はい。充分なほどに理解できました」

「うん。なら、片付けて帰ろうか」

「……はい」

しくしくしく……そう、呟きながら信長はススキを片付け始めた。牧はそれに同情し、片付けに付合った。

セッティングする時とは違って、片付けは早かった。校庭の隅からとってきたススキは、部室棟の入口にあるごみ箱に放り込まれた。団子の入っていたパッケージは持ち帰る（そうしないと、見付かったときに停学処分になるからだ）。

立て掛けていた梯子を元の場所に戻し、警備員に見付からないように校舎を後にする。

「なんだか 今世紀最後のお月見 は忘れられない思い出になりそうです」

「そう。ならよかったじゃない」

「……そういうものかな」

「そういうものにしておけば 今世紀最後のいい思い出になるん

「じゃないのかな」

「……」

てくてくと、3人並んで帰路につく。長く伸びた影が濃い。見上げれば、眩いばかりの満月。冷たい金色の大きな月に、うさぎが跳ねている。

「でもさあ……もし、月にうさぎがいたとして、アポロ14号に乗っていた宇宙飛行士がそれを発見したらかなりびっくりするだろうねえ」

「やめるよ、現実と非現実をごったにして話するのは」

「でも、月にいると言われているのが全部いたら怖いですよねえ、きつと」

「うさぎと、かえる。ジヨウガって名前の女神もいるし、きつとかぐや姫なんかもいたりして……」

「で、ジヨウガって女神とかぐや姫ではどっちが偉いんだ？」

「女神でしょ、神様なんだから。かぐや姫って俗称でしょ。ってことは、本当は姫かどうかもアヤシイ」

「かぐや姫って確か、何か罪を犯してそれで地球に落とされたんじゃないかったか」

「何の罪なんですかねえ」

「月の民大量虐殺」ぽつりと呟いたのは牧。

それを聞いて、いいねえと神は言ってから続ける。

「満月って、昇りたてのとき気持ち悪いくらい赤いじゃない。あれは、その所為なんだよ」

「そうそう。それで月には何もなくなつた。残つたのは荒れ果てた土地だけ」

「うわ、怖っ」

「……」

「そうやって考えると、お月見つていやなものになるなあ……」

「でも、お月見の醍醐味は、届かない満月を見ながらどれだけ想像を膨らませるか、じゃないですか。今みたいに」

「おお。ノブナガたまにはいいこというな」

「たまには、って、何ですか。失礼な」

「いや……」

「うーん。でもいい月でよかったねえ」

「……それで済む問題ですからね」

「所詮、月見といつてもこの程度のものなんだもんな」

そう、しみじみと呟いて牧は月を仰ぐ。

「ここで一句詠めたら凄いなだろうな」

「満月や、ああ満月や満月や」

「……」深々と溜息を吐いて、牧は信長をちらと見た。

「やはりこいつはこの程度だ」

「ひどいツスよ牧さん。あ、神さんそこで笑わない」

「お前煩い」

「煩いって何ですか、ヒドイ」

ふたりが子供染みた口喧嘩を始めながら歩いていくのを見ながら、やれやれと呟いて神は軽く溜息を吐く。ぎゃあぎゃあと騒いでいるふたりを放っておいて、神は先に歩き出す。

「でも……お月見って結局、本当はどんな行事なんだろう……」

呑気にそう呟いて、神は月を仰いだ。大きく光る満月を見詰めながら「綺麗だなあ」と呟いたとき、ぴょんと何かが跳ねた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0587f/>

お月見

2010年10月28日06時52分発行